

☆地域包括ケアふじえだプロジェクト☆

令和2年2月7日 VOL. 129

認知症になっても安心して暮らせるまち「ふじえだ」を考えるワークショップを開催

令和2年1月30日（木）生涯学習センターを会場に、市民やケアマネジャー、キャラバン・メイト（認知症サポーター養成講座の講師役）、認知症の人に優しいお店・事業所、認知症の本人や家族、地域包括支援センター職員等、多様な立場の80名の参加を得て開催しました。

本ワークショップでは、**認知症の人の声から、認知症になっても安心して暮らせるまち「ふじえだ」に向けた支援体制の構築と地域づくりの推進**を目的に、シンポジウムとグループワークを行いました。

シンポジウム テーマ：認知症の人とともに考える～認知症になっても安心して暮らせるまち～



シンポジスト：認知症の人に優しい事業所 株式会社 藪崎新聞店 松浦 孝司 氏

平成26年に認知症サポーター養成講座を受講し、新聞販売店として認知症の人にできることは何かを考え、配達中に“あれ、おかしいな？”と感じたら、声をかける、歩行者信号を押さずに待っている人がいたら手を差し伸べる、外灯が切れていたら交換するのを手伝う等、出来ることを行い、月に1回の社内の定例会で活動の報告を行っている。

コーディネーター：名古屋市社会福祉協議会 認知症相談支援センター 鬼頭 史樹 氏

認知症の人に優しいお店・事業所が見守り等の活動を仕事であり役割として当たり前に行っている。それぞれの立場で、地域に何が出来るかを考え、やれるところから取組んでいる。このそれぞれの取組が“優しいまち”に繋がっていく。

これまでには認知症の人との関係性の中で「そのひと“に”何が出来るか」を考えてきたが、これからは「そのひと“と”何が出来るか」を考えていきたい。“for”から“with”への発想の転換が求められている。

【参加者の声】

- ・ 認知症の人は何もできないと思っていたが、できることはある。それを理解して、ともに生活していく環境が大切、考えが変わった。
- ・ 認知症のことを知ってもらうことが地域にとって優しいまちかと思っていたが、認知症の人でも社会参加できるまちが優しいまちだと思った。
- ・ 優しい事業所の話聞き、一人ひとりが意識をすることで大きな力になることを実感した。
- ・ 優しいお店の取組を知り、心強く感じた。
- ・ こうした機会が安心して暮らせるまちに繋がっていく。

シンポジスト：認知症の本人 三浦 繁雄 氏

平成26年に軽度認知障害の診断を受け、退職した。他の認知症当事者との出会いが、前向きになるきっかけとなり、精米店に再就職し、生活の中で工夫を凝らしながら、認知症とともに暮らしている。当事者からのアドバイスを受け、認知症であることを、周囲に伝え、日常の中で、困りごとはあるが、できないことより“やりたいこと”を大切にしている。**認知症になったの特効薬は『ひとぐすり』である。どの薬よりも、みんなと会ったり、繋がることで元気になる。人と関わるのが一番の薬になる。認知症の人に対して“こんなことをさせてあげよう”ではなく認知症の人の“こんなことがしたい”を大切にしてほしい。**

シンポジスト：認知症の人に優しい事業所 広幡郵便局 石原 義則 氏

平成27年から認知症サポーター養成講座を定期的に受講しており、認知症と思われる人や高齢者に対する職員の対応時の意識の変化を感じている。窓口での対応や、配達中の見守りだけでなく、市内の各郵便局に防災士の資格を持つ職員を配置しており、地域の拠点として幅広く活動を展開している。



グループワーク

市民や専門職、認知症の人に優しいお店・事業所等、それぞれが、立場を越えて感想を話し合い、意見交換を行ないました。また、シンポジストへの質問を行いながら、本人の声や安心して暮らせるまちづくりに向けた考えを深めていきました。



バックNoの検索は

